

奈良女大家政 相川佳予子

1. 宋代は唐の貴族文化が庶民階級にまで浸透して、中国近世における庶民文化が発達し確立した時代である。庶民の風俗や生活様式は当時の随筆類や絵画からある程度知ることができるので、下記の資料によって都市生活者の服飾の実態をあきらかにし、中国近世の庶民服飾について考察を試みた。

2. 資料は宋代の随筆夢溪筆談、東京夢華録、夢梁録を中心としてこれに関連する文献資料、および白沙発掘の宋墓壁画、清明上河図を絵画資料として使用した。

3. 古来中国人は頭をあらわすことを忌み、必ず結髪してかぶりものをつけたことが知られている。かぶりものは身分や職業に応じて多種のものが用いられているが、古くから庶民のかぶりものとされたのは巾である。巾は本来腰にさげておく手拭を頭をおおうのに使ったのがはじめとされるが、この時代の庶民のかぶりものは巾、幘頭、帽であった。幘頭は6世紀の後半に巾の変形として作られ、材料、製作技法、形などに種々の変遷を経て宋代に伝えられている。宋代の幘頭には10種にあまる変化型が認められ、単純型より複雑型へすすみ、さらに種々の変化型を生むという衣服の発達の法則に合致していることが知られる。また、これらは古くから支配者階級に使われていた冠と変遷の系統を異にするものと思われ、巾から幘頭へ変化し、これに古くから存在した帽の形式が加わって多くの変化型を生み出したものとみられる。